

第58回神奈川建築コンクール 住宅部門 最優秀作品選評「360°」

審査委員 稲田 深智子

猛暑の日に見学に行くと、かわいらしい住まいが見えてきた。小さい灰色の箱の上に水平の庇、さらにふかふかの緑の芝生の上に黒い小屋がのっている。この家の住み手である建築家がビーチサンダル履きで立っていた。

脇から室内に入り数段下がり、斜めからの光に導かれて見上げると吹き抜けの高窓から光が下りている。さらにL字型に開けられた窓から外の景色が目に入ってくる。そこが家族の集まる主空間である。床は地上から900mm掘り下げられ、外に2,550mm突き出た深い庇を通して空と緑が見える。人間は囲われ守られたうす暗いところから明るいところを眺めたいという習性があるといわれるが、それをあらためて実感できる気持ちのいい空間である。イスに座って窓越しに見上げると動物の低い視点で外の自然を身近に感じることができる。振り返ると1段下がったところに主寝室があり、大きな引き戸を開ければ、空間はさらに広がる。少し奥まったキッチンは天井が高く、縦長の窓から光や風が入る。さらに数段上がったところに低い天井の畳のロフトが見える。折り返して上がると2階である。

2階の窓から芝生の屋根に出ると高台なので視界が一気に開け、隣地は調整池のため遮るものは何もない。1階の半ば囲われた空間と対照的に、まるで船の甲板に出たような爽快さである。このように、縦長や横長の泡のような空間を重層的に組み合わせ、それぞれの個性を際立たせながら、ゆるやかにまとまっている。

1階の床を掘ったことで、夏は涼しく、冬は暖かく、芝生の断熱効果も期待できる。また、階段下の小さな空間にキャンプ用具のランタンが並び、L字型の開口部の下には、こけしや本が置かれ、家族の趣味や暮らしぶりがほどよく見えて温かい雰囲気にも包まれている。この作品には、いろいろな工夫があるが、押しつけがましさは感じられない。床・壁・天井には構造用合板を多用し、収納扉はフレキシブルボードと荒い仕上げ材であるが、不思議となじんでいて、新しい住まいなのに、すでに住み慣れた落ち着きを感じさせる。

最初に構想があってそれに合う土地を探したという。スケッチしながら、つくることが楽しくてしょうがないという建築家の気持ちが伝わるような、おおらかな作品となっている。この作品に招き入れられたひとは、自分なりの住まいをつくってみたくなるだろう。そんな魅力的な作品である。